

## 夢の中まで会いに来て

夢を見る。ユメの嫌な記憶と大切な記憶とがぐち

やぐちやになつた、趣味の悪い夢。どうせ見るなら、  
その時だけでも幸せになれる夢が良い。あのひと  
の日々をそのまま映した夢が見たい。……ねえ王子  
さま。どうかユメを、救い出して。

「王子さま……？」

『泣かないで』

「あ……」

ぼやけた天井は真っ暗できつと朝にはほど遠い。  
瞼をぎゅっと瞑つたら目尻からベッドのシーツへ涙  
が伝う。ぼやけた世界からくつきりとしたクリアな

世界に変わつても、当たり前に辺りはあまり見えな  
かつた。

「……どうせなら、ユメも——」

一緒に連れて行つて。あのひとを思い浮かべながら  
口に出そうとしたその言葉はすんでのところで呑  
み込む。今はまだ、エスのそばにいてあげなきや。  
エスはまだまだアイドルとしても王子さまとしても

未熟で、目が離せないから。

想いを閉じ込めるようにまぶたを閉じる。きらき  
ら輝くお空の星を思い浮かべながら。夢の中でも、  
きつと見られますように。願つてゐるうちに意識が  
遠のいていく。

上から降つてきた懐かしいその声にゆつくりと顔  
を上げた。雪が降る、星の綺麗な夜だつた。

「おい。どうしたんだよ、泣いてんのか？」

「あれ？ エス……？」

「アハハ。ひどい顔だな！」

泣いてないし、ひどい顔だなんてひどい！ そう

言い返そうとした時、自分の意思とは関係なく目頭  
が熱くなつて、ユメの頬に涙がつたつた。顎先でた  
まつた涙はやがて後から流れてくる涙と一緒に地面  
に落ちる。

「ユメ、泣いてる……」

「泣いてるよ、さつきからずつと。おまえまさか気

づかなかつたのか？」

「ずっと？ 悲しくなるような出来事には心当たりがない。疑問に思いながらも、アハハと笑うエスにユメはぷくっと頬を膨らませた。

「そんなに笑わないで」

エスは本当にこういうところがある。今だつて、かわいいユメがこんなにも涙を流しているのにまたかつて呆れたような顔をしてる。けれど悔しいことにそれに救われたことも一度ではなくて。例えばそう、ちょうど今みたいに雪が降つていたあの日……。

そこまで考えたところで、これがそのあの日をほんとどそのままなぞつていることに気がついた。まるでそうするのが当然のようにユメの顔を覗き込んできたエスが、堪えきれないよう吹き出して、でも優しく家に招いてくれて。これはそんな、忘れられないあの日の再演のようだつた。

……ああ、きつと、夢の続きをね。たしかに夜空には無数の星がきらめいてる。ちゃんとユメが頼つたままだ。